

人の性向と言語表現

児玉 徳美

1. 言動の基礎

人は種として生得的にもっている能力の開発と生後社会での経験を介して習得する知識とに基づいて行動する。行動様式は生得的能力の発達段階及び経験に基づく知識に応じて変化する。これは言語表現においても同様である。人は一気に母語を習得して駆使用するわけではない。段階的に習得しながら母語知識を拡大していく。習得段階はそれぞれ連続体をなしているが、習得される母語知識を大別すると、臨界期前に開発されるものと臨界期後に習得されるものに分かれる。前者は主に人間の生得的能力に由来し、言語の刺激を与えられると、大人からいちいち教えてもらわなくても文を生成理解するようになり、短期間に無意識のうち多くの語彙を習得し、母語話者間でその言語知識にそれほどの違いがない。後者は使用語彙領域や敬語表現・言説の秩序などで、環境により強い影響を受け、時代や個人による違いが大きい。もちろん両者は連続体をなし、その境界は決して明確ではない。しかし本稿は両者の違いに焦点を当てるものではない。本稿の目的は人が有する性向が言語表現にどのように反映しているかを考察することにある。性向といえ、生得的な能力に由来する先天的なものが多いと想定されるが、ここでも先天的と後天的なものを区別しない。そこで本稿は児玉（2005b）のようにヒト/人を区別しないで、両者を人または人間で表すことにする。

言語研究の目的は人がどのように言語知識を習得し、その知識をどのように蓄積・操作し、どのように言語表現に転換するかについての心的過程を明らかにすることである。今日、言語表現が生まれるまでの心的

過程の全体像が明らかでない。全体像がどのように組み立てられているのか、その原理を探っている段階である。全体像に接近するには大きく2つの方法がある。1つは部分から全体へ向かって全体がしかじかの部分からなるとする還元主義（reductionism）プログラムであり、あと1つは大枠から部分へ向かって、つまり第1次的な原理原則を出発点として段階的に第2次的・第3次的な原理原則を組み立てて全体の階層性を明らかにする構成主義（constructivism）プログラムである。全体の階層性がどのように組み立てられているか、諸原理や諸原則が何をもちて基本的・派生的とするか、必ずしも明らかではない。第1次的・第2次的などの順序づけそのものに妥当性がなく、諸原理・諸原則が相互に入り乱れて適用されるのかもしれない。しかし人の言動に多くの普遍性や共通点がみられるとすれば、原理原則の間に何らかの階層性があるともしえる。言語表現成立までの全体像を明らかにするためには、分析対象によって両方の立場から検討する必要があるが、本稿は当面後者の立場から考察する。かなり思弁的なものであり、ここで論ずる原理原則がすべてとは思わない。今後追加したり統合する必要もあろう。その点、本稿は言語表現の全体像に迫る第1歩にすぎない。

言語は現実世界の必要なあらゆる情報を記号化する点でコミュニケーションの道具である。同時に言語は人間の認知の道具であり、人間が世界をどう把握するかにかかわり、人間の思考や意図の基礎にある。言語がどのように認知や思考にかかわるかを理解するためには、言語がなぜ今の姿をしているかの問題を解く必要がある。この問題は人間の有する認知能力の特徴と密接に結合している。言語を「コミュニケーションの道具」とみようと「認知の道具」や「思考の基礎」とみようと、人間が言語に関与している点では変わりがない。言語はコミュニケーションの道具として現実世界の必要な情報を記号化するが、その際、どの言語においても例えば数・定性・一般か特殊かの区別などは名詞句で表されるが、事物の色彩を

示す形態素が名詞につくことはないし、出来事が起こったのが昼か夜かの違いを示す動詞が存在するわけではない。現実世界を記述・伝達するうえで必要なものと不要なものを区別しているが、この区別はコミュニケーションだけでなく人間の認知や思考の区別でもある。

人間は多様な能力を有しているが、その最も基本的な性向としては、進化の過程で合理性（rationality）志向という属性を獲得したと考えられる。人間が合理的存在者として行動をとるとすれば、その行動は理にかなった、または辻褃の合う目的を達成するために価値ある方策を求めて行くことになる。語用論（pragmatics）の基礎をきづいたグライス Griceが晩年の1980年代に価値観（values）や理性（reason）・合理性（rationality）を論じたのもこのような立場からであった（詳しくはグライス1991,2001参照）。

合理性志向といえば、「ものごとの真偽の基準となるのは普遍性をもつ理性である」とか「本当の知識は理性によってのみ得られる」とする合理主義か、それともそうした理性／反[非]理性という二項対立を批判する反[非]合理主義かという問題がある。両者の立場は絶対的な理性や普遍性を認めるか否かによって違ってくるが、ここではそうした哲学上の論争に入るつもりはない。主張したいことは人間の行動が目的志向であり、その過程では絶えず価値観が関与し、自分の価値観に合った目的を達成しようとする点である。つまり行動の目的が「理性」に合うものか否かは問わないが、例えば自分が他者より優位であることを保持するために、現状の秩序を守ろうとしたり、自分の力を誇示したり、他者を攻撃したりする。いずれの行為も価値観に基づく目的を達成しようということから生まれている。目的が「理性」に合うか否かを問わないとはいえ、目的を理由づけする価値観や目的そのものの選択順位は常に注目され賞賛や批判の対象となる。

人間は行動する際、基本的には合理性を志向しながら具体的には最適

原則 (best-fit principle) に従っているとみられる。最適原則とは特定の事例を蓄積している知識と照合させ、最もうまく適合する知識を特定の事例に適用する原則をいう (例えば菅山 Sugayama 2005:183 参照)。人は一般に無秩序や無意味を嫌う。現実世界である事物に出会うとその存在理由を考え、複数の事物に出会うとその関連づけを考える。存在理由や関連づけのない事物は当面の考えに無関係なものとして無視する。すなわち現実世界で経験する事物であるトークン (token) に最も適合する知識として概念化されているタイプ (type) を探す。例えば話しことばで /b/ の音に出会うと、その音を dread の d でなく bread の最初の音 b と整合させ、/bi:/ の音に出会うと、前後のコンテキストの中で意味上語彙知識の be (be 動詞) が bee (ミツバチ) か、あるいはアルファベットの b であるかを決定していく。

これまで語用論はコンテキストの中で発せられる一連の文をいかに分析するかに腐心してきた。そこでは文と文あるいは文とコンテキストとの関連性や一貫性、あるいは言語活動で働く推論のメカニズムを分析する理論として関連性理論・一貫性理論・新グライス派など多様な分析法が展開しているが、いずれも最適原則を明らかにしようとする点では共通している。違いは何を機軸に最適の原則や規則を探るかにある。

次例を参照されたい。

- (1) a. Dogs must be carried. (犬は抱いて乗ってください)
b. You must carry dogs. (みなさん、犬を抱いて乗ってください)
 - (2) The city council denied the demonstrators a permit because...
(市議会はデモ参加者に許可を出さなかった。というのは)
 - a. they feared violence. (彼らは暴力を恐れたから)
 - b. they advocated violence. (彼らは暴力を唱えていたから)
- ウィノグラード Winograd (1972:33)
- (3) A1: Can I have milk for my coffee? (コーヒーに入れるミルクは

ある？)

A2: She always cleans the refrigerator very well. (彼女はいつも
冷蔵庫をきれいにしている)

B: There's milk in the refrigerator.

(1a,b) は受身文とその能動文であるが、エスカレーターの昇降口に張る
掲示文として (a) はよいが、(b) はだれもが犬を連れてくるわけではな
く不適切である。(2a,b) のtheyは文法上city councilとdemonstratorsの
いずれの解釈も可能であるが、通例 (a) はcity council ,(b) はdemon-
stratorsとみなされる。(3) はAとBの対話である。A1、A2のいずれを受
けてBを発したかにより、Bの意味は違って来る。A1に対しては「(コー
ヒーに入れる) ミルクは冷蔵庫にある」となるが、A2に対しては「(でも)
冷蔵庫にミルクがついている」となる。いずれの場合も語の意味、文法、
場面の状況、世界についての知識などが協働して理にかなった辻褄の合
う解釈を探っている。

合理性志向や最適原則を頂点として、どのような原理・原則が人の言
動に働いているかを次節以降でみていく。

2 . 概念の形成：範疇化

人は概念 (concept) を用いて事物を分類区別する。概念は人が周りに
あるものを知覚し、分類する過程で形成される。例えば野菜・果物・テ
ーブル・いす・イヌ・ネコなどを分類区別する際、§ 1 でみた最適原則
を援用しながら機能的推論を働かせて個別の事例からモデルとしての範
疇を形成する。範疇を形成する概念は抽象化された心的表示 (mental
representation) である。概念範疇の心的表示はしばしば語と結合して
範疇のモデル、すなわち範疇の一般的なタイプとして標準化され、多く
の人にとって共通の知識として認知構造に蓄積されていく。例えば「イ

又」という概念範疇は多くの人に共通する属性をもつものであり、特定の場面で特定の状態（立っているか／座っているかなど）の「イヌ」の心的イメージではない。もし概念という抽象化の心的過程が存在しなかったなら、周りの個別のものにいちいち異なる名称を付すことになり、人間として処理しきれない膨大な語彙情報が必要になる。

概念は差異対立を基礎に他の概念の存在を前提にしている。標準化された知識としての概念範疇は階層をなしており、一般性の高い上位範疇とその成員である下位範疇が網の目のようにつながっている。例えば April という概念はカレンダーの知識があってはじめて解釈が可能になり、cat（ネコ）の概念は mew（ニャ - ニャ - 鳴く）、like fish（魚が好き）、mammal（哺乳動物）などの概念と関連するため The cat has a heart.（ネコには心臓がある）という文も可能になる。範疇や語と結合する概念は人が広範な知識を蓄積するための前提をなしている。概念が存在することにより人は知覚・学習・記憶・推論する際の情報を処理することができる。

概念の範疇は語（または語の意味）と結合するが、両者は必ずしも常に一致するわけではない。

(4) a. bachelor vs unmarried man

b. run vs walk

(4a) はどちらも UNMARRIED と MAN の元素概念が結合したもので同じ複合概念を示す。元素概念は自然言語に語彙化されることもあるが、語彙化された語の意味より小さい場合も大きい場合もある。そこで語の意味はしばしば概念が結合した複合概念からなる。(4b) の run と walk はともに足を使って「前への移動」を示すが、その「速さ」に違いがある。概念は語の意味を特徴づける意味素性（HUMAN, MALE など）や動詞に対して名詞がになう意味役割（動作主・対象・手段・道具など）と一致することもある。このような意味素性や意味役割は普遍性を有し、本来、

非言語的世界を把握する人間の認知過程で生まれた概念範疇である。発生論的には言語構造に現れた意味が非言語的概念に転用されるというより、むしろ非言語的概念が言語構造にも利用されているとみるほうが正確であろう。概念は多様な範疇を区別するのが主要な役割であり、(4b)からうかがえるように、意味素性や意味役割より広い領域をもつ一般的な範疇にも用いられる。

概念は範疇の広狭に関係なく、特定の範疇についての一般的な考えであり、語または文の意味のようなあいまいさはない。

(5) Peter is standing up. (ピーターは立っている / 立とうとしている)

(6) The bear eats honey. (そのクマ / クマ(という動物)は蜂蜜を食べる)

(5)のis standing upは()内のように多義であり、(6)のThe bearも特定のクマか一般のクマかであいまいである(チェイフChafe 1970:77参照)。 (5)(6)はそれぞれ1つの言語形式で複数の概念または意味を表している。

言語は無限ともいえる現実世界を有限の記号で表しており、語の意味は本来柔軟性を有し、多様な概念を含んでいる。例えばトマト・炎・サルのお尻をしばしば「赤い」と形容するがその「赤」には違いがあり、「大きな」ノミと「大きな」建物では「大きさ」の規模が異なる。「人々」というとき2・3人をみた場合と10万人を見た場合、言語では同じ複数形にするが、実感は異なる。また「太郎」が「走る」ときと「列車」が「走る」ときでは心的実体も違っているはずである。

概念や範疇は必ずしも常に言語を必要とするわけでもない。言語をもたない動物でも図形などに対してある程度の範疇化能力をもっている。また自然言語においても言語化されない概念がある。アラビア語にはあらゆる「ラクダ」を表す一般語がなく、エスキモー語には「雪」の一般語がないが、アラビア人やエスキモー人に「ラクダ」や「雪」の概念が

ないわけではない。ニューギニアのダニ語 (Dani) では色彩語として mili (暗く冷たい色) と mola (明るく暖かい色) の2つの色名しかないとされるが、ダニ人が白・赤・黒・黄・青などを識別できないわけではない。

概念範疇が言語の範疇と必ずしも一致しないことから、諸言語間で同じ概念の言語上の表し方、つまり言語化が異なるのも不思議でない。

(7) a. I am wearing pants.

b. I am putting on pants.

c. 私はズボンをはいている。

(8) a. go down下がって行く/ take a pen out (of one's pocket) (ポケットから) 万年筆を出す

b. walk into a house歩いて家の中へ入る/ run a robber out of town街から強盗を追い出す

(7) の英語は状態 (a) と行為 (b) を動詞によって区別しているが、(c) の日本語は同じ動詞で状態も行為も表している。(8a,b) は英語・ドイツ語などの衛星フレーム言語では下線部の経路が副詞や前置詞によって表され、移動と状態が1つの動詞 (walk, runなど) によって表されるのに対して、日本語・朝鮮語のような動詞フレーム言語では経路と移動が結合して1つの動詞によって表され、状態もまた1つの別の動詞 (歩いて/走って、など) によって表される (詳しくは児玉2005b参照)。

概念範疇と言語範疇が必ずしも一致しないとはいえ、多くの共通点もある。モデルと事例、タイプとトークン、内包と外延などの関係の捉え方である。範疇化とかかわって特質継承の原則や基本範疇優先の原則などが働いている。

まず特質継承の原則からみてみよう。標準化された知識としてもつ概念範疇は範疇のモデルと呼ばれるが、われわれは外界に接する際、絶えずこのモデルと現実の具体的事物を整合させて外界の事物が何であるか

を認識している。例えばある動物を見てネコと認知する場合、その動物はネコのすべての特質を備えていなければならないわけではない。蓄積されている標準からの逸脱も許される。ネコが交通事故で3本足であっても、いったんネコと認めた場合、逸脱した特質以外の面ではネコのモデルの特質をすべて含むものとみなされる。このように特定の事物（つまり例示）があるモデルに属するとみなす場合、その例示が例外的情報を除いてそのモデルのすべての特質をもつとみなすことを特質継承の原則と呼ぶ。この原則は既定値原則（default principle）とも呼ばれる。日常生活で実際に接する外界の事物に対して実際の経験によって得る情報よりはるかに多くの間接的情報をわれわれに提供している。例えばAがモデルBの例示であり、さらにBがモデルCの例示であることを知ることにより、われわれはAがモデルCの例示でもあるという一連の推論を行なっている（詳しくは児玉1991:122-126参照）。この一連の推論過程ではモデルのステレオタイプに寄りかかりステレオタイプに反する情報を無視したり、ステレオタイプそのものがまちがっていることにより誤解や偏見を生むこともある。

特質継承の原則が言語表現に適用される場合をみてみよう。言語表現の発話行為（utterance-event）は行動や伝達などのモデルでもある出来事（event）の一種とみなされる。問題は発話行為の結果である言語表現が非言語世界の出来事からどのような特質を継承しているのかということになる。先ほど（4）との関連で、本来、非言語世界を把握する認知構造に關与する概念範疇であるはずの意味素性や意味役割が言語構造に利用されていることをみたが、これも特質継承の原則が適用された結果とみれば不思議でない。次例も参照されたい。

(9) a. At the hotel I met a young lady.

そのホテルでは若い婦人と会った。

b. Yesterday the older one he didn't use at his office.

きのうは古いほうは事務所で使わなかった。

(9a,b) の日英語の下線部は文頭に位置し、文の枠組みを設定する場面設定詞 (scene-setter) の働きをしている。場面設定詞になりうるのは (9a,b) のように場所や時間を表す副詞語句であって、様態や方向などを表す副詞語句は用いられない。日本語でも副詞語句の場面設定詞は名詞語句の題目 (topic) に前置する。場面設定詞が場所語や時間語に限られるのも、場所や時間の概念が外界のあらゆる出来事に付随することの反映である。

用例 (1a, b)(2a, b) の意味解釈の違いも、主語のモデルがはたす機能やステレオタイプとして存在する現実世界の知識の特質を継承して生じている。

基本範疇優先の原則に従った言語表現として次例を参照されたい。

(10) a. the tree by the cow (牛のそばの木)

b.*?the tree by the animal (動物のそばの木)

c.*?the tree by the Holstein (ホルスタインのそばの木)

(11) He saw some animal under the ladder. (はしごの下に何か動物を見た)

(12) He met a woman at his office. (事務所である女に会った)

(10) は牛のそばの木を見ているときの描写である。cowが基本範疇であり、通例 (a) が用いられる。(b) のanimalは一般的すぎ、(c) のHolsteinは特殊すぎる。もっとも酪農家にとってはcowは一般的すぎ、牛の種類が基本範疇であり(c) が適格となりうる。(11) の文は、はしごの下にイヌやネコを見たときの描写としては基本範疇を用いていないため不適格である。しかしイヌともネコともいえず範疇を特定できない生き物の場合は適格である。(12) では彼が事務所であった女性が「彼の妻」や「彼の母」であれば基本範疇のhis wifeやhis motherを用いる。a womanは人にとっての基本範疇であるにしても、「彼」にとっての基本

範疇ではなく「他人の女性」の意味となる。

記述対象のどの面を強調し基本範疇とするかによって、同じ対象の捉え方が異なり範疇化も違って来る。例えば魚は類別詞として一般に「匹」で数えられるが、魚の種類や職業・専門によっては「本、尾、頭」で数えられたりする。家族同然のペットを「人」で数えるのも同じ理由による。

概念範疇の形成は知識・記憶・思考・推論の基礎にあり、人間の認知活動や言語活動を支えている。本節で扱った特質継承の原則や基本範疇優先の原則も同様である。両原則は階層性や包摂関係をもつ諸概念を利用することにより、言及されない事象に対しても多くの間接的情報を提供し、推論を含む思考過程全域で働いている。

3. 概念の連合：類似性・隣接・因果関係に基づいて

かつてヒュームHume（1740, 木曾訳22）は観念（idea）はばらばらに存在するのではなく、複雑な観念を形成するためには、諸観念を連合（または統合）させる原理が存在し、その原理として類似性（resemblance）、時間または場所における隣接（contiguity in time and place）、原因と結果（cause and effect）の3つの関係（性質）があるとした。この3つの関係が観念の連合を生みだし、一方の観念が現れれば他方の観念を自然に心に導き入れるようになるという。人間が複雑な概念を形成する思考のメカニズムを3つの連合原理にまとめた点、極めて野心的なものである。より正確に言えば、ヒュームは心に現れるものをすべて知覚（perception）と呼び、知覚を観念と印象（impression）の2種類に分け、観念は印象の写しであり再現であるとした（詳しくは真船2005参照）。連合は観念と印象の両方で生じるが、ヒュームのいう観念・印象はいずれも心的表示を意味しており本稿での概念にほぼ相当する。この3つの関係が複雑概念の形成をすべて説明すると思えないが、人は類似

性・隣接・因果関係を中心に諸概念を連合せせ豊かにする性向をもって
いることは確かである。

概念の連合が言語表現にどのように反映されているかをみてみよう。

(13) a. Bill went to the movies, and Hillary went to the store.

(ビルは映画へ行き、ヒラリーは店へ行った)

b. Bill went to the movies, and (then) he came home.

(ビルは映画へ行って家に帰った)

c. Bill went to the movies, and (as a result) Hillary got upset.

(ビルは映画へ行ったのでヒラリーは怒った)

ケーラーKehler (2002:26) はヒュームの3種の原理を応用して一貫性理論を展開している。(13a-c) はそこで論じられている例であるが、2つの節がandで結ばれており、それぞれ類似性に基づく対比・時間における隣接・因果関係による連合を示している。

3種の例についてももう少し詳しくみてみよう。まず類似性に基づく概念連合から考察する。

(14) a. Your argument is *indefensible*./ So far, we haven't covered *much*.

(君の論拠は守りきれない / これまでのところあまり扱っていない)

b. Time *flies like an arrow*./ We *passed* the time happily.

(時は矢のように過ぎる / 時間を楽しく過ごした)

c. He is *like* a father to me./ He's not *so tall as* his brother.

(彼は私にとって父のような人だ / 彼は弟ほど背が高くない)

(15) Margaret Thatcher admires Hillary Clinton, and George W. Bush absolutely worships *her*.

(マーガレット・サッチャーはヒラリー・クリントンを評価し、ジョージ・ブッシュは彼女を高く評価している)

(14a,b)は隠喩、(14c)は直喩でいずれも類似性に基づいている。(14a)では議論が戦争や場所にたとえられ、(14b)で時間が移動物や場所にたとえられている。(15)ではBushもThatcherも保守的でBushが政敵ともしているClintonを「評価する」と思えず、常識的に末尾のherはThatcherをさすとみられるかもしれない。しかし実際はともに目的語の位置にあるという文法上の類似性からherは通例 Clintonとみなされる(亀山Kameyama 1999参照)。諸概念の連合は(14a-c)のように概念の特質により決定されることもあるが、(1a,b)(15)のように統語上の言語構造が関与することもある。

ことばは言語記号として、本来、象徴機能をはたすが、象徴は類似性を基礎にしたものである。文内の語句だけでなく、談話や物語全体がたとえ話や寓話として、または象徴詩のように、直接語られる内容と異なる世界を暗示することもある。

次に隣接に基づいて概念を連合する例をみてみよう。

- (16) a. 矛をおさめる(戦いを止める) / 頭を使う(頭脳を働かす)
b. boil the kettle (お湯を沸かす) / the White House (米国大統領官邸)
- (17) a. The bike is next to the building.=*The building is next to the bike.
(バイクは建物のすぐそばにある)
- b. I met her on the street.=*She met me on the street.
(私は彼女に通りで会った)
- (18) a. 太郎は眠りについた。空を飛んでいる夢を見た。=*太郎は空を飛んでいる夢を見た。眠りについた。
b. 太郎は朝から晩まで働いた。=*?太郎は晩まで朝から働いた。
- (19) a. 他 在桌子上 跳。
(彼はテーブルの上で跳びはねた)

b. 他 跳 在桌子上。

(彼はテーブルの上へ跳びのった)

(20) a. 一本の桜の木があった。まだ葉がついていた。 = ??まだ葉があった。葉は一本の桜の木についていた。

b. 「花子はどうしている？」の質問に答えて

会社でアルバイトをしている。仕事は電話番だ。 = *仕事は電話番だ。会社でアルバイトをしている。

(16a,b) は日英語の換喩の例である。ある事物を表現するために、近くにあってそれと密接に関係するもので置き換えている。(17a,b) は各文において隣接する2つの(代)名詞の関係を述べており、対の文は論理的に等価のようにみえるが、後の文は認知上も言語上も、何が主語になりうるかを決定する「図と地の原則」に違反しており不適格である。同様に(18a,b)はそれぞれ2つの文からなり、出来事の発生順序とかわる。対をなす後の文は写像一貫性の原則に違反し不適格である。(19a,b)の中国語は同じ語句からなるが、認知上の時間的順序の違いが語順に反映しており、写像一貫性の原則に従っている。(20a,b)は対をなす後の文がそれぞれ「大 小」「一般的 具体的」の記述原則に違反し不適格である(用例(17)-(20)について詳しくは児玉2004a:94-95参照)。

因果関係に基づく概念の連合をみてみよう。§1で述べたように、人は合理性を志向するなかで一般に無秩序や無意味を嫌う。多様な出来事や事象の間に筋道の通った理由づけや何らかの法則を見出そうとする。その際、法則として最もよく用いるものが因果関係である。出来事の間因果関係があるときに、それを見落とすことは人間に限らず生物にとって致命的なことになりかねない。その点、出来事に因果関係を探ることは生物が生き残るための本能的な性向である。時間的には通例原因が先行し、そこから結果が生じることになる。

- (21) a. 私は自分の美しい家を誇りに思う。
b. 悲しみと失望は怒りを生み、ねたみは悪意を生む。
- (22) a. 花子はおなかがすいていた。花子は食堂へ行った。= 花子は食堂へ行った。花子はおなかがすいていた。
b. John dropped the glass. It broke. =The glass broke. John dropped it. (ジョンはコップを落とした。コップが割れた。=コップが割れた。ジョンがコップを落とした(のだ))
- (23) a. A man who had hostility toward her hit Mary.= A man hit Mary who had hostility toward her.
(メアリに敵意を抱いていた男がメアリを殴った)
- b. A man who was wearing a T-shirt hit Mary. = *A man hit Mary who was wearing a T-shirt.
(Tシャツを着ていた男がメアリを殴った)

因果関係は通例命題間に生じるが、ヒュームは命題間だけでなく、(21a,b)の下線部の名詞にも因果関係を認めている(石川2005参照)。(22a,b)の日英語は2つの文を逆にしても適格である。その点、(18a)と異なる。つまり、文間に直接の因果関係が成立しているときは写像一貫性に違反しても許される。これは因果関係が文間に強く働いている証拠である。(23a,b)の後の文はwho節が主要名詞句から離れ文末に外置しているが、(a)と(b)で適格性が異なる。ここでも外置が許されるのは主節と外置節の間に因果関係が成立している場合に限られる。用例(22)(23)の分析は海宝(2005)の指摘による。

因果関係は狭義には原因が結果を直接導くものをさし、理由づけとして最も強力なものであるが、広く解釈すると、条件 帰結、目的 遂行、起点 着点なども因果関係の応用とみなすことができる。

- (24) 他来、我去。
a. 彼が来るなら、私は行く。

b. 彼が来るので、私は行く。

c. 彼が来るが、私は行く。

d. 彼が来ても、私は行く。

(25) a. John took a train from Paris to Istanbul. He has family there.

b. ?John took a train from Paris to Istanbul. He likes spinach.

(26) a. John went from Kyoto to Tokyo.

b. John went to Tokyo.

c. *John went from Kyoto.

(24) の中国語は 2 つの節が並んでいるが、接続詞も用いられていない。写像一貫性の原則に従い、従節の「他来」が時間的にも認知上も「我去」の主節に先行している。従節は文脈によって意味上条件 (a) 理由 (b) 対比 (c) 譲歩 (d) を表すことができる。(25a,b) はケーラー (2002:2) によるが、適格性が異なる。これは 2 つの文が何らかのつながりをもつか否かによる。(a) ではジョンが列車に乗る理由が明示されていないが、「家族がイスタンブールにいる」ので会いに行くのだなと推論できる。しかし (b) は「ホーレン草が好き」とイスタンブール行きとは関連づけが困難なため不適格となる。(26a) の起点と着点は写像一貫性の原則とも関連し、論理的に対等の対をなすが、英語・日本語などの多くの言語では認知上も言語構造上も着点を重視する。そこで (26b) のように起点がなくても着点があれば問題がないが、(26c) のように着点がなく起点だけでは落ち着きがなく意味をなさない。ほぼ似たことが起点と着点に対応する原因と結果にもいえる (詳しくは児玉2005b参照)。

最後に概念と意味の関係について整理しておく。概念は、§ 2 の冒頭でみたように、範疇化と関連して事物に対して多くの人が共通に心に抱く心的表示であり、特定範疇のモデルである。したがって概念はしばしば語と結合し、語の意味と対応し、その異同が対比される。時には複合

概念が (4a)(5) などの句 (phrase) の意味とも対応する。ただし同じ句でも my uncle in America (アメリカにいる私のおじ) にはモデルとして多くの人に共通する具体的な心的表示があるわけではない。心的表示として存在するのは語の意味を結合したものにすぎない。語の心的表示はともかく、言語表現を解釈する際は現実世界についての認知能力や知識を形成する概念も関与している。そのことは (9a,b) の副詞語句、(13) (18a)(20) - (25) の節にうかがえる。

言語化された文言が伝えるものを意味、言語化されてなく話し手の意図を伝えるものを概念と呼ぶとすれば、概念は句や節の意味を抽象化したり句や節を関連づけたり言外の文脈情報を形成するものであり、前後の句や節の意味と協働して言語表現の適格性の判断に関与していくことになる。概念は語の意味を含む言語表現の意味を生み出す源泉である。言語化された語の意味となることもあれば、言語表現のうち語より小さいレベルや語より大きいレベルの意味と結合することもある。言語表現の意味と非言語的な概念は語においては一致したり一致しなかったりしてその一部は対応関係にあるが、句・節・文と大きくなるにつれて両者は対応関係というより相互依存関係にある。例えば (24) の中国語は (a-d) の意味に解釈されるが、この解釈は従節と主節の意味と両者を関連づける概念が協働して形成される。従節や主節の文言が意味上異なれば、両者を関連づける条件・理由・対比などの概念も異なる。

意味と概念は言語表現のレベルによって対応関係を形成したり相互依存関係を形成する違いはあるが、通例互いに他を前提にした密接な関係にある点では変わりがない。したがって両者はしばしば同義にも用いられる。言語表現の意味が概念を含んだり、逆に言語表現の意味づけを概念化と呼んだりする。その結果、(24) の中国語における主節と従節の関係は (a-d) の意味を表すといえるが、「意味」を「概念」と変えてもそれほどの違いはない。

本節で扱った写像一貫性の原則や因果関係は談話全体の展開において中心的な役割をはたすこともある。例えば物語が時系列に沿って出来事を述べたり、言説が因果性を軸に出来事を論じる場合である。ここでは写像一貫性の原則や因果関係が思考過程全体の進展を支配している。

4．思考と言動の過程

4.1．思考の形成：何をどのように考えるか

これまでは主として文、または隣接する2・3の文を対象に、概念の範疇化や概念の連合がどのような役割をはたしているかを考察してきた。本節は文を超えてまとまりをなす談話（や言説）を対象に、人の思考や言動がどのような特徴をもつかをみていく。その枠組みとしてはハリデーHallidayらの選択体系機能言語学が提唱する言語構造の3機能を利用する。この理論によると、言語構造の中心をなす意味体系は何をどのように誰が誰に語るかに応じて、観念形成機能・テキスト形成機能・対人関係形成機能に区分される（詳しくは児玉（準備中1）参照）。この3機能は主として言語構造を分析するためのものであるが、本節は言語表現のうち特に談話が社会ではたす役割に焦点をあて、この3機能をそれぞれ思考の形成・情報の伝達・対人関係の形成の側面から論ずる。まず思考の形成からみていく。

文構造においては動詞を手がかりにして主語・目的語などの構造を予測できる。しかし文の連なる談話においてはその展開を予測することが困難である。隣接する2・3の文またはパラグラフ内のまとまりはある程度予測できるにしても、談話全体の流れを予測することはできない。こうした予測性の違いは何に由来するのであろうか。その違いを明らかにすることは思考形成の本質に迫ることにもなる。

予測性の違いをもたらす第1の原因は文と談話を構成する各要素のコ

ード（規約）性の強弱にある。本来、構造とは構造全体を構成する諸単位の有機的な相互関係が規定されるものをいう。その点、談話構造の「構造」は文構造の「構造」とは異なるものを意味している。文構造の各要素は、結合可能な要素と不可能な要素を選別し厳しい相互関係にあるのに対して、談話構造の各要素（各文）の結合はゆるやかなもので、予測できないほどの多様な選択肢の中から選ばれていく。これが談話内で進行する思考過程の最大の特徴といえる。しかし複数の文の集合に接したとき、単に無関係な文の寄せ集めか、まとまりをなす談話かは直感的に判断できる。まとまりを構成する制約は話題（topic）・主題（main idea）・結束性（cohesion）・一貫性（coherence）・関連性（relevance）・価値観（values）など意味上のものである。（不）適格性の判断が可能であるとすれば、そこにはゆるやかながらも文構造とは異なる「構造」が存在している（詳しくは児玉2004a:74-98参照）。談話が談話としてまとまりをなすことは、§1でみたように、人が無秩序や無意味を嫌い合理性志向の性向をもつ証拠でもある。

第2の原因は談話での思考が文脈に強く依存していることである。談話は特定の場面で発せられるものであり、文脈情報の中には話し手の意図、先行文の内容、その場での知覚、背景的知識など、言語的・非言語的情報が含まれる。談話ではこの文脈情報によって(5)(6)などの文のあいまいさは解消されていく。次例では思考過程において言語的情報と非言語的情報が区別なく利用されている。

(27) A: What time is it?

B: The bus just went by.

(28) A: What did she say?

B: The bus is coming. / That man has a gun.

(27)(28)はAとBの対話である。(27)ではA・Bが共通知識をして例えば「バスはいつも7時30分に通る」ことを知っていれば、話は通じる。

(28) でAのsheが実際にBの発言のように言ったともとれるが、より普通にはAの問いと関係なく、A・B2人が待っている「バスが来ましたよ」や、その場に現れた「あの人は銃を持っている」の意味に解釈される。(28) は当面の話題よりその場で緊急性があり、より重要なことには誰もが注目するという暗黙の人間の反応に基づいている。

第3の原因は思考の流れが柔軟に変化し、意味情報が多様に展開することである。

(29) Then I will come to my mother by and by. [Aside] They fool me
to the top of my bent I will come by and by.

シェクスピアShakespeare, Hamlet III.ii.373

(では、すぐに母上のところへ行くよ。[傍白]みんなで馬鹿にしゃがって、精一杯我慢しているんだ。すぐ行くよ。)

(30) Part of the art of being a woman

is knowing when not to be too much of a lady.

(女であることの術のひとつはレイディでありすぎないことを知ることである)

(29) はハムレットのポローニアスへの応答であるが、その中の番目の文には応答と無関係な傍白が割り込んでいる。ハムレットの心の中ではポローニアスへの応答と「みんな馬鹿にしゃがって」という周囲への怒りが同時に進行している。ことばは時間の流れにそって線条的に流れ、一時に2つのことばを発することはできないが、思考過程では同時に複数の思考が共存することもある。思考は一見多様に展開する意味の世界において自由で柔軟性に富んでいるとはいえ、人は無意識のうちに時代や社会の価値観に縛られ、その価値観の枠内で思考していることもある。このような思考の制約は「言説の秩序」として現れる。(30) はブレガ - Brøgger (1992:74) によるが、ある化粧品会社の広告である。半分透けたドレスを着てにっこり微笑んでいる美人モデルが写っている。woman

とladyの含意の違いを巧みに利用している。the art of being a womanではwomanであることは本来生得的なものであるが、実は自ら魅力的にする「術」であるといい、後半部分ではときにladyのように「お上品」にならないようにとも忠告している。ここには女性にはその性だけで女性とみられるのではなく、他人がそうだと認めるイメージに自ら作り上げて行く必要があり、女性にとってはそうした術や容姿を身につけることが大事であるという価値観が隠されている（詳しくは児玉2004a：83参照）。性差別を再生産しているか否かはともかく、このような広告文は現代の欧米社会や日本などで通用する「言説の秩序」である。しかし世界の多くの地域では通用しないし、欧米や日本でも100年前には通用しなかったであろう。

上記3つの原因は互いに密接に関連しながら談話という形式の中で思考を形成している。文構造と異なるとはいえ、談話が談話として思考のまとまりをなしていることは、§1でみたように、人が無秩序・無意味を嫌い、合理性志向の特質をもっていることの証拠である。

最後に思考と言語表現と論理について少し考えてみよう。例えば「トマトは赤い」と「リンゴは赤い」から「トマトとリンゴは同じ色である」という文が引き出され、「すべての人は死ぬ」「ソクラテスは人である」から「だからソクラテスは死ぬ」という結論が導かれる。このような言語表現には論理操作や推論が働いている。しかし本節の初めにみたように、文構造と談話構造には予測性において大きな違いがあり、談話や言説、特に価値観などが関与する言説においては人によってその意味解釈も異なる。推論は思考や言語表現の全域において同じ論理操作や演算体系が働くこともあるが、個人の価値観や偏見、あるいは言説の秩序によっては異なる論理操作を受け、異なる演算体系が働くこともある。

4.2. 情報の伝達：いかに効果的に情報を伝達するか

情報の伝達や交換は表現媒体（話しことばか書きことばか）、使用域（話題・場面などに応じて日常ことばか専門用語か）、ジャンル（韻文か散文の物語文か説明文か説得文か）、参加者の労力（話し手と聞き手のいずれの労力を重視するか）などによってスタイルや語り口、あるいは意味の表出法が違ってくる。効果的に情報を伝達するためには多様な言語表現のうち状況に応じてふさわしいスタイルや語り口を選ぶことが要請される。ここではスタイルや語り口の個別の違いを論ずるのではなく、状況に応じてなぜ多様な違いが生じるのか、また言語表現と人間の行動一般の間にはどのような異同があるのかをみていく。

§ 1 では人間が合理性を志向して行動すると述べた。合理的存在者としての人間は行動において何らかの目的をもち、それを達成しようとしている。その過程で問題があればそれを効果的に解決しようとする。問題解決には推論・判断・決定などがかわる。例えば医者が患者を診断する際は患者の年齢・性・生活習慣などの文脈情報も利用しながら症状から病気を突きとめ、文脈情報や症状に応じた治療をほどこす。またゲームでは競技者が敵・味方に分かれて勝負を競うが、状況によっては勝負より時間つぶしを目的にゲームに興じる場合もある。情報の伝達や交換においても同様である。言語表現においても目的にふさわしいスタイルや語り口を選ぶ。例えば時間つぶしのおしゃべりではそれにふさわしい話題やスピーチ・レベルや話し相手を選ぶことになる。説得文では価値観を含めて自分の立場を論理的に表明し、相手を納得させようとする。会議の招集連絡や料理のレシピの説明伝達文では価値観などを提示することは無用である。

ジフZipf (1949:22) は、人間のあらゆる行動に最小労力の原則（principle of least effort）が貫いていることを論じている。例えば、人にA地点からB地点に行くよう依頼すると、何の指示を与えなくても通例最短の

近道または時間をとってB地点に行く。これは言語表現においても同様である。多様な意味が言語化されているが、話し手としてはことばを用いる労力を節約して1語で多くの用を足したいと思い、逆に聞き手としてはことばを解釈する労力を節約してそれぞれの語に1つの意味をもたせ、意味の違いに応じて異なる語を用いてほしいと思っているという。この最小労力の原則は話し手と聞き手の側で反対に働いている。その後グライス(1975)は発話の生成解釈において会話の協調原則と4つの公理を提案したが、その1つである量の公理は(1)「必要なだけの情報を与えよ」と(2)「必要以上の情報を与えるな」の2つに下位区分されている。これは一見矛盾した公理に見えるが、(1)が聞き手の論理であり、(2)が話し手の論理である(詳しくは児玉2004a:143-147参照)。次例を参照されたい。

(31) a. He ate three carrots in fact he ate four /*none.

(彼は3本のニンジンを食べた。実際は4本だ/*何も食べなかった)

b. I'm happy indeed, I'm ecstatic / *unhappy.

(幸せです。全くこの上なく幸せです/*不幸です)

(32) a. John unpacked the picnic. The beer was warm. /*The book was heavy.

(ジョンは野外パーティの荷物を解いた。ビールは温かった/*本は重かった)

b. She walked into the room. The chandelier was magnificent. /?The chandelier was in the cupboard.

(彼女は歩いて部屋に入った。シャンデリアはすばらしかった/?シャンデリアは戸棚にあった)

(31)(32)の(不)適格性の違いはなぜ生じるのであろうか。(31)の(不)適格性の違いは公理(1)と関連する。「必要なだけの情報を与え

よ」から言われていないことはわからないことになり、尺度をもつ表現において断定した尺度は最小限のものであり、それより下方（下限）は取り消しできないが、その尺度より上方（上限）は取り消し可能なことになる。（31a）では尺度のthreeを基準に下方修正はできないが、上方修正は可能になる。（32）の（不）適格性の違いは公理（2）と関連する。「必要以上の情報を与えるな」から言われていることはステレオタイプを通して具体化され、その適用範囲にあるもの（下限）に言及できるが、その適用範囲を超えるもの（上限）については言及が許されないことになる。（32a）の場合picnicとの関連でその適用範囲内にあるbeerはつながるが、適用範囲外にあるbookはつながらないため適格性が異なる。

最小労力の原則が話し手と聞き手で相反する機能をもっているが、どちらの機能を重視するかにより諸言語間で違いが生まれる。一般に英語は1語の有する語義が多く、話し手の意図や文間の関係を示す高次表意が欠如するのに対して、日本語は1語の語義が少なく、英語の高次表意がしばしば言語化される。例えばwater, runは英和学習辞書によると名詞・動詞を含めて30から70近くの語義があがっているが、それとほぼ同じ規模の日本語辞書では「水」「走る」は3～7の語義が示されているにすぎない。高次表現の例として英語のHe's coming toward us.は話し手の意図として陳述・警告・確認・予想のいずれにも用いられるが、日本語では話し手の意図に応じて異なる終助詞をつける（詳しくは児玉2004a:33参照）。英語が話し手の労力を少なくし、文脈に照らして多様な語義の中からふさわしい語義を選び話し手の意図を解釈する労力を聞き手に課しているのに対して、日本語は聞き手の労力を少なくするために語義の選択肢を少なくし、高次表意を言語化している。つまり英語が話し手の論理に従った言語であるのに対して、日本語は聞き手に配慮した言語であるということになる（詳しくは児玉（準備中1）参照）。諸言語間による情報の効果的な伝達方法の違いはしばしば良好な対人関係の形

成方法の違いにもつながる。

話し手と聞き手の論理の違いは一見言語に限られるように見えるが、非言語的な行動パターンにもうかがえる。行動の基準を自分に置くか他者との関係に置くかの違いである。英語圏の文化はともかく、日本（人）の行動パターンの特質として「和を以って貴しとする」、甘えの構造、察しの文化、ウチとソト、恥、ファッション志向の強さなどがしばしば指摘される。いずれも相手（他者・対象）の存在を前提にし相手との関係で相対的に自己が規定されている。日本語と同じく行動パターンにも対象依存性に敏感な特徴がうかがえる。

4.3. 対人関係の形成：いかにうまく人間相互の結びつきをはかるか

言語は種としての人の生得的・普遍的能力の上に形成されているが、現実に人が使用する言語は少なくとも表面的には普遍的ではなく多様である。従来、この使用言語の異同が言語共同体を形成維持させたり、異なる言語を用いる人々を排除する基礎になっていた。しかし今日「地球社会」時代を迎えて1つの社会に多言語話者や多言語情報が混在し、かつての言語共同体の基礎が崩れつつある。

使用言語が同じものであろうと異なるものであろうと、他者との関係を築くには言語を介する以外に方法がない。前節でみたように、対人関係の形成過程は情報の効果的な伝達方法と密接に結合している。親しい者どうしの間か初対面の間か上下関係のある人の間かなど、誰が誰に語るかの参与者の関係によって語り口も違ってくる。例えば同じ意図が命令文や依頼文や願望文によって表される。人は言語活動を介して他者とのよりよい関係や自分のよりよい生活をめざしている。一方では他者（グループ）との共生、平和を願いながら、他方では自己（グループ）保身、上昇志向、力の獲得などを求めている。主として後者との関連でジャッケンドフ Jackendoff（1993:212）は社会の基盤にある概念として親

族関係・集団帰属・優位性の3つをあげている。この3つは人が生き残るために身につけた「知恵」かもしれない。

フェアクラフFairclough (1995:98) が指摘するように、談話行為は社会的行為の一種であり、言語活動は一方で社会や時代の影響を受けながら、他方では新しい社会を形成している。言説の秩序が生まれるのは前者の結果であり、時代による社会の変化は主に後者に起因し、言説に埋め込まれた価値観によって引き起こされる。社会の中での行動基準の特徴はいずれも知覚に基づくものではなく、すべて社会の環境を原動力として生まれるものである。環境の中で生まれたとはいえ、言語構造が普遍性と多様性をもつように、言語活動にも多くの社会・文化の間で共通するものと異なるものがある。

具体的に言語表現との関連をみてみよう。話し相手や事象が自分の領域の内にあるか外にあるかにより対象に対する接し方が異なるが、このような<なわ張り>意識が言語構造に反映することをなわ張りの原則と呼ぶ。神尾(1990)の「情報のなわ張り理論」によると、話し手または聞き手と文の表す情報との間には心理的距離が存在し、この距離は<近>および<遠>の2つに分かれる。話し手または聞き手に<近>である情報が話し手または聞き手の<なわ張り>に属し、<遠>である情報が<なわ張り>の外に属する。これを表にすると、文の表す情報は次の4つの領域に分かれる。

(33)

		話し手のなわ張り	
		内	外
聞き手の なわ張り	外	A	D
	内	B	C

話し手と聞き手のなわ張りの内と外が交差するA - Dに対応する英語・日本語の用例は次のようになる。

(34) A. I feel lonely.

ボクは淋しい。

B. It's a beautiful day.

すばらしい天気ですね。

C. You seem to have forgotten that.

あなた、あのことを忘れていた**みたい**ね。

D. Jane looked like she was feeling lonely.

ジェーンは淋し**そう**だった。

英語では話し手のなわ張りに属するA・Bは一般に確定的な断言の形をとる「直接形」で表現され、話し手のなわ張りに属さないC・Dは下線部からうかがえるように、断言を避けた不確定な「間接形」で表現される。他方、日本語ではAは直接形、Bは直接形に「ね」のついた形、Cは間接形に「ね」のついた形、Dは間接形で表現される。上例の下線部は話し手の心的態度を表すモダリティ表現とも呼べるものである。一般に英語が話し手自身のなわ張りの内か外かだけを問題にするのに対して、日本語はさらに(34)の終助詞「ね」からうかがえるように聞き手のなわ張りの内か外かも区別している。同じことが指示表現において英語のthis thatの二分法に対して日本語の「こ・そ・あ」の三分法にもいえる(なわ張り理論の詳しい考察については神尾1990, 2002参照)。日本語が英語に比べ、聞き手のなわ張りに配慮していることは、前節でみた最小労力の原則において日本語が聞き手の理解労力を少なくするよう配慮していることと共通している。いずれもよりよい対人関係を形成しようとして対象依存性に敏感な結果である。

上記のなわ張りの原則は文構造において形態上合図されるが、談話または言説にはどのような性向がみられるのであろうか。談話、特に話し手の価値観が色濃く現れる言説においては、何を語り何を語らないかについて主張の内容が違ってくる。一般に語りたいものだけを語り、(話し

手にとって不利やいやで) 語りたくないものには口をつぐむ。語りたいものだけを語る性向の具体例については児玉(2004b, 2005a)を参照されたい。

なわ張りの原則と談話において語りたいものだけを語り語りたくないものに口をつぐむ性向は、ともになわ張りをもち、一見共通の行動様式に見えるが、その意図は基本的に異なる。前者のなわ張りの原則は話し手が聞き手との良好な関係を築くため、相互の心理的距離を測りながら聞き手に対して不可侵の領域を守ろうとするのに対して、後者の談話や言説において語りたいものだけを語る性向は保身のため話し手の利益を守ろうとするもので聞き手への配慮はない。

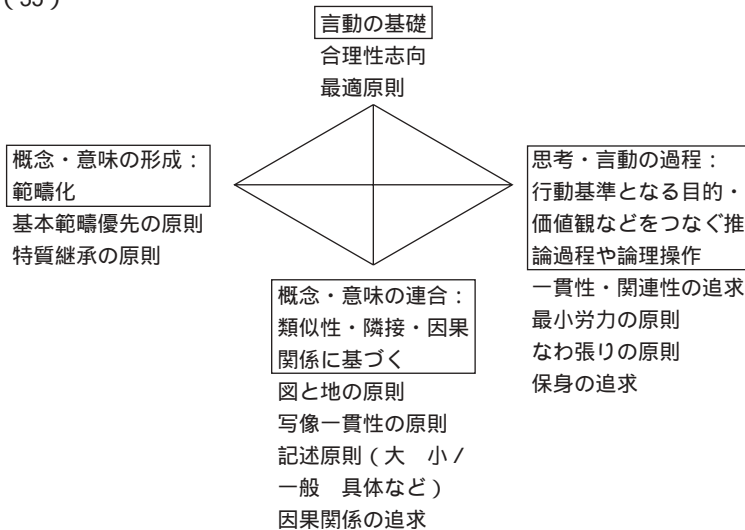
§4でみたように、言語活動において何をどのように思考し、ことばを用いて何をどのように表現するか、また社会においてどのような対人関係を形成するかなどについて文構造はごく一部の答えしか提供しない。言語活動の全体像に迫るには談話や言説を分析対象にしてはじめて可能になることが明らかになった。談話や言説には人の性向に由来する言動の目的意識が常に関与し、その目的には何らかの価値観が埋め込まれている。階層をなす多様な目的や価値観は網の目のようにつながり、同じ個人においても状況によって矛盾したり対立することもある。この目的や価値観は常に環境や条件によって決定される相対的なものとも思えない。環境や条件から独立した絶対的価値としてどのようなものがあるのだろうか。人が合理的存在者として行動する際、合理性について相対的なものと絶対的なものをどのように区別しているのだろうか、これは今後の課題である。

5 . おわりに

本稿は言語活動を含む人間の行動においてどのような原則や傾向がみられるかを論じてきた。問題が大きいだけに、その全体像が明白になったわけではない。§ 1 で述べたように、かなり思弁的なものであり、また § 4 の末尾で述べたような課題も残っている。今後、言語活動や人の行動の全体像に迫るための第 1 歩であるにすぎない。

本稿で論じた行動領域およびそこにみられる原則や傾向は次のようになる。

(35)



で囲まれている部分が行動領域であり、その下に各領域で働く原則や傾向がまとめられている。4つの行動領域が実線で結ばれているが、実線は各領域とその原則・傾向が相互に関連していることを示す。多様な原則や傾向は場面や状況によって結合したり競合したり対立するが、恣意的にふるまうわけではない。§ 2 では階層をなす概念範疇を形成す

ることにより人が知識を獲得するとしたが、それと同じように、§ 3、§ 4 で述べた各行動領域内の諸原則や諸傾向の間にも何らかの階層性があり、人はその階層性を守ることによりなんとか辻褃の合うふるまいをしている。

(35) の階層性は不動のものではない。かなり柔軟性をもつものであり、環境や条件によって重視する原則や傾向に違いが出てくる。個人や言語共同体での言語表現や行動の違いもこの階層性の違いによる。そこで働く諸原則や諸傾向の相互依存関係や階層性を明らかにすることが今後の最大の課題といえる。

引用文献

- Brogger, F.C. 1992. *Culture, Language, Text*. Oslo: Scandinavian University Press.
- Chafe, W.L. 1970. *Meaning and the Structure of Language*. Chicago: University of Chicago Press.
- Fairclough, N. 1995. *Critical Discourse Analysis: the critical study of language*. Harlow: Longman
- Grice, P. 1991. *The Conception of Value*. Oxford: Oxford University Press.
. 2001. *Aspects of Reason*. Oxford: Oxford University Press.
- Hume, D. 1740. *A Treatise of Human Nature, Being An Attempt to introduce the experimental Method of Reasoning into Moral Subjects*. (木曾好能訳, 1995, 『人間本性論 第一巻 知性について』東京:法政大学出版局)
- 石川 徹. 2005. 「ヒュームの情念論」中才 (2005) 179-206 .
- Jackendoff, R. 1993. *Patterns in the Mind: Language and human nature*. Hemel Hempstead: Harvester Wheatsheaf.
- 海宝康臣. 2005. 「因果関係と言語表現」(六甲英語学研究会での口頭発表).
- Kameyama, M. 1999. 'Stressed and Unstressed pronouns: Complementary Preference.' In *Focus: Linguistic, Cognitive, and Computational Perspectives*, ed. P.Bosch and R. van der Sandt. 306-321. Cambridge: Cambridge University Press.

- 神尾昭雄. 1990. 『情報のなわ張り理論 言語の機能的分析』東京：大修館書店 .
- . 2002. 『続・情報のなわ張り理論』東京：大修館書店.
- Kehler, A. 2002. *Coherence, Reference, and the Theory of Grammar*. Stanford: CSLI Publications.
- 児玉徳美. 1991. 『言語のしくみ 意味と形の統合』東京：大修館書店.
- . 2004a. 『意味分析の新展開 ことばのひろがりに応える』東京：大修館書店.
- . 2004b. 「意味分析の対象拡大により見えてくるもの：言語分析から人文社会科学へ」『立命館文学』585:14-29 .
- . 2005a. 「価値観の重層性」『立命館法学』別冊（ことばとそのひろがり（3） 山本岩夫教授退職記念論集）95-131 .
- . 2005b. 「ヒトと言語と社会」『立命館文学』590:1-16 .
- .（準備中1）「ことばが力を失うとき」.
- .（準備中2）「言語分析の再編に向けて」.
- 真船えり. 2005. 「ヒュームにおける心の理論 心的実体の観念と心身問題について」中才（2005）86-109 .
- 中才敏郎（編）. 2005. 『ヒューム読本』東京：法政大学出版局 .
- Sugayama, K（代表）. 2005. 『Word Grammar理論の研究』（科学研究費補助金による研究成果報告書）.
- Winograd, T. 1972. *Understanding Natural Language*. New York: Academic Press.
- Zipf, G.K. 1949. *Human Behavior and the Principle of Least Effort: An Introduction to Human Ecology*. Cambridge, MA: Addison Wesley Press.